

【オリアム隨筆賞（佳作）】

左胸のお守り

鹿住 敏子・埼玉県白岡市

もうすぐ九十才になる秋田の母から、手編みの品が届いた。淡い黄色と白の二色の毛糸で編まれたそれは、ちょうど浴用タオルくらいの大きさ。マフラーにするには、少し短い。それでも、手先の器用だった母の編み目に、年齢による衰えは、まったく感じられない。ひと目も落としてしまうことなく、きれいにそろっている。

すぐには、使い道は思いつかないけれど、母の年齢を考えると、とても貴重な品だと思いい、大切にしまっておいた。淡い黄色の毛糸は、母が、だいぶ以前に、編み機で編んでくれた、私のセーターの色とよく似ている。

小児がんの一つである脳腫瘍の息子との生活で、何年も帰省できない年月が続いた。長い闘病の末、三十二歳で息子が旅立った。数年ぶりに帰省した時、母の記憶は少しづつ衰え始めていた。

そんな母が、急に何かを思い出したように自分の部屋に入つていった。押し入れを開けると、衣装箱を取り出し、次々と中の衣類を外へ出していく。一つ目が終わると二つ目の衣装箱。その中の衣類も全部外に放り出した。それは、おもちゃ箱から目当てのおもちゃを探すときの、一心な子どもの姿にも似ていた。母が大きな変調をきたしたのかと、はらはらしながらも、口出しさせずに、その様子を見守っていた。そして、三つ目のケースを開けて、同じように衣類を出して、底の方まできたとき、

「あつた！」と言つて、黄色いセーターを、勢いよく取り出した。

「着てみれ」と言いながら、そのセーターを私の胸にあててくれる。私の好きな、淡い黄色の毛糸で編まれたセーター。その裾の方には、可愛らしい菜の花が、編み込み模様で散りばめられている。母が得意な、編み機で編んでくれたものに違いない。菜の花の編み込み模様が、どれだけ手間のかかるものなのか、子どものころから、そばで見ていた私には想像がつく。

そのセーターをぼうつと見ていると

「敏子、はやぐ着てみれ」とせかされた。

少しひちぴちだけれど、なんとか着ることができた。

このセーターを、母は、どのくらい前に編んでくれていたのだろう。少なくとも、私は、今よりも瘦せていて、このセーターがぴったりのころだろう。何がきっかけかはわからな

いけれど、このセーターのことを突然思い出して、衣装箱から探し出してくれたのだ。

セーターを着た私の姿を、あまりにも喜んでくれたので、埼玉へ帰るときにも着て、母に見送られて家を出た。

今回、送られてきた、この少しだけ長さが足りないマフラーのようなものは、あの時のセーターの色ととてもよく似ている。

送つてもらった母の手編みの品に、大切な使い道が見つかった。

今年の一月。乳がんで、左胸の全摘出手術を受けた。回復は順調で、一ヶ月後には、車の運転も始めた。ただ、シートベルトが触れる箇所は、手術後の左胸を保護しなければならない。何がいいのかと考えたときに、母が編んでくれたそれを思い出した。大切にしまってあつた袋から取り出し、運転の際にシートベルトの下に当ててみた。柔らかくてちょうどよい。長すぎないことが、逆に使い勝手がいい。何よりも母に守られているみたいだ。乳がんの診断が下った日、弟には、もう少し詳しい検査結果が出てから連絡しようと思っていた。しかし、その夜、弟の方から電話が来た。

「母さんが亡くなつた」

乳がんの診断と母の死。こんなことが、同じ日に起ころるなんて……。

弟に乳がんのことを告げると

「母さんは、もう、亡くなつてしまつたのだから、自分の検査と治療を優先した方がいい」と言つてくれた。母のことは、弟たちにお願いして、その後の検査と治療に専念した。

手術後にできた左胸の一本の傷跡。それは、大事な茶碗が欠けてしまつたときに継ぐ、金継ぎを思わせた。その茶碗が、金継ぎしたことで、いつそう大切なものとなるように、左胸の傷跡も、命を守ってくれた大切な証しだ。繊細で優しい傷跡の付いた左胸を、愛おしいと思う。

その傷跡の上を、母が編んでくれたもので大切に保護する。金継ぎにも似た傷跡と、その上を覆う母の手で編まれたものは、左胸の大切なお守りだ。

私の診断が付いた日に、母が慌てたように旅立つたのは、自分の残りの命を、娘に継いでくれるためだったのかもしれない。